

月は見ている

木場和子

真夜中にひっそりと息をひそめては、暗闇の孤独に身を任せて私は小説を書いている。私は十分な満足感に浸されている。文学には未知の世界が待っている。―さあ、思う存分書いてご覧なさいな。遠慮などいるものですか。此処は貴方だけのものなのですと。

だが果たして、たちまち行き詰まり文章の向こう岸に辿り着くことが出来ない。それが出来れば、どれほどの幸せを感じられるだろう。私はまだその幸福を知らない。

まれに、溢れるような言葉に出会って、慌てて筆を執り書き出した途端に言葉は尽きてしまうのだ。それはあつけないほど私の前から消えてしまう。

行間の奥深く言葉が埋まってしまつて出てこない。

私が長い期間、書いていた文章はただ他人が興味を抱く文章作りだけであつた。売れさえすればどんな物だつて良いんだ。―そんな週刊雑誌に三流記事を書いて生きてきた。

今、そんな悪癖がついつい文章に出てしまう。私はどうしても次の文に進めなかつた。苦しくなつて私は庭に出る。

ひんやりとした夜気を吸い込み立ち尽くす。満天の星が輝き続ける。果てしない遠い宇宙の果てから光が届く。何万年もの尊い光だ。涙が一筋、頬を伝う。

「こんばんは」

突然、背中からくぐもつた声があつて来た。そうまるで何かにあつたような衝撃であつた。

私は驚いて「キャー」と言つたつもりだが実際には声は全く出なかつた。

広い庭の西方に置いてある丸い石の上に一人の男性が座つていた。

「何なの！ 驚かせないで！ こんな夜更けに人の庭に侵入して一体何だつて言うのよ！」
私は恐怖と怒りで同じ言葉を男にぶつめた。

「それは申し訳ありません」

男はやけに丁寧な口調であつた。

落ち着き払つた様子から、長い間こうしていたのかと推測された。

すると私はもつと怒らなければと思ひながら、体が震えるばかりで次の言葉が上手く出さなかつた。

しかも勝手に口から出てきたのは気持ちとは全く反した言葉であつた。

「ところで貴方は此処で何をしていたの？」

真っ白なマスクが男を余計、不気味にさせた。

男の体臭が微かに漂う暗闇の中で聞くような内容ではなかった。失敗したと私は思った。そう来るだろうとばかりに男は嬉しそうに声を弾ませて言った。

「もちろん、この美しい星空を眺めるためですよ。見てごらんなさいな。この大宇宙の果てしない夜空を。そこには数え切れない無数の星たちが輝いているのですよ」

多分、四〇代の半ばと言ったところだろうか。

厚かましさと純粹さとが、まぜこぜになったその男はそう言った。

「だから？」

だから、勝手に他人の庭に深夜に入り込んでいるなんて許せないことなのだ。私はそう言いたかったのに、無論こんな非常識な男に通じる訳がないだろう。

そう思うと、もう力が抜けて何も言う気が起きてこなかった。

「分かりますよ。私だって貴方が怒っていることはね。無断で他人の庭に入り込み、それも深夜にね、星を見ていたなんて理由にもなりませんからね。だが、良く考えても見て下さい。だってこの宇宙は一体誰かの物だと言うわけではないでしょう？」

男は咳払いを二つ三つした。

それから溜息を大きく吐くと急に温和しくなった。

私は黙り込み、恐ろしさの所為か、寒さの所為なのか足下から上がってくる震えを感じながら動くことも出来ず立っていた。そう、まるで金縛りに遭ったようにだ。

それもすべて承知したかのような態度で、相変わらず男は其処に座っていた。

「まあ、何も心配することはないのです。だって私はこうしてずっと生きてきたのですからね」

そう言う男は満足したような感さえ感じられた。

不思議なことだが漆黒の闇のなかで男は充分に存在感さえ保っていた。

徐々に私のなかにも不思議な興味が湧いてきたが、それを慌てて消した。

「ともかく私は貴方がどこの誰なのかも、そしていつから私の庭でこんな姿をしていたのか全く知りません。それってやはり変だと思いませんか？ 厳しく言えば不法侵入ですよ」

止めようと思いつながら妙な具合に嵌って行く自分が情けなかった。

案の定、男はまた口を開いた。

「おっと。それを言うなら住居侵入罪が正しい。刑法130条前段に規定される罪のこと」
そして男は怒ったように立ち上がり言った。

「おや、何て小さな男なんだろう……私の前を通り過ぎる男は私の背丈と同じくらいだったし、右足を少し引きずっていた。

「残念ですな。こんな風に実に下らない話になるなんて。少なくとも文を書き作り上げる人の言葉とは思えない。実に残念です。僕は帰ります。貴方も仕事をなさると良い……」

くるりと後を振り返り、男はすたすたと門に向かいそして闇の中に消えて行った。

深夜のマスク男は、はなはだしく自己主張に満ちた態度で私を苛立たせた。

星空はどこまでも高く、月が永遠の光を放っていた。

すっかり冷え切った体で部屋に戻ると、ウイスキーのお湯割りを一気に飲み込んだ。熱い液体が体中に広がると、ようやく震えは止まり、落ち着いてきた。

私は書きかけの原稿を抱えていて風邪をひくわけにはいかなかったのだ。

机に向かった私だが、やがて眠気が襲ってきて意識が無くなった。原稿を書く余力はもう無くなった。

翌日の夜も、翌々日の夜も彼が私の庭に現れる事はなかった……ようだ。

けれどきつと何処かで彼は私は見ているのではないかと思うと心が安まらなかった。

夜になると門にかんぬきを掛けて庭には入れないようにした。

頑丈な鉄製の門を打ち破り侵入するのは誰人であれ、例え野良猫のドラちゃんでも難しくつたに違いない。

男は何処かで星を眺め、詩人にも成っている事だろう！と思うことにした。

今、取りかかっている作品は月刊雑誌の連載物で、三十ページの短編小説を六ヶ月の掲載予定で書いていた。雑誌は北の地方では、一応名の知られた出版社が発行していた。

私は得意としている幾つかのストーリーを織り交ぜながら展開して行くつもりだった。

主人公の青年が持つピュアな心が発見する幸福や希望。哀しみや絶望と言った、永遠に普遍的な題材を彼に与えていきたいと考えていた。

第一回では、彼が小学生の時、街にサーカスがやって来た話だ。

彼は両親とそれを見に行った。：ズンダッタ：の音楽がなっていたかはもう記憶にない。テントの中では、高いブランコに乗った二人が左右から交差して行ったり、瞬間、一人がもう一人の両手にぶら下がる。何度か恐ろしくなるほど、危険な演技が行われた。彼は気分が悪くなり、表に出た。その時にピエロの化粧をした小さな女の子と出会った。ニッコリと笑って彼女はテントの中に入って行った。その夜、サーカス団はまた他所の街へ出発していった。

翌月号では、高校生の彼は、山奥の家から離れた隣町に下宿をして農業高校に通っていた話だ。彼や級友たちの楽しみと言えば街のラーメン屋に行つて食べたりおしゃべりしたりすると言う他愛のないことだった。その店には中国人の少女が店員として働いていた。何故、少女はその店にいたのだろう。黒髪を一つに束ねた顔がきりつとして美しかった。日本語が上手く話せず、しょっちゅう店の主人に叱られていた。彼と級友たちは、その女の子と仲良くなりたくて少ない小遣いで通っていた。やはり、その日も少女は店の主人に叱られていた。眼には涙が光っていた。その夜、少女は店を逃げ出して、客のヤクザの男の所に逃げ出した。

―サヨウナラ―彼等に少女は心の中でそう言ったに違いない。

続いている号で書いたのは、青年としての苦悩であった。政治的な宗教的な人間的なそして生と死であった。誰ひとりこの世に生を受けたならば死は免れない。

彼の周囲で起こる身近な人々の死が彼をどう生きさせて行くのか。そんな課題も含めての物語の展開であった。

この後、私の構想には、幾つかの断片だけがあった。それを考え文章化し、はたまた校訂しなければならなかった。考えては文を書き付け、読み直してはまた書き直す。幾度も同じ事を繰り返した。

子どもの頃から私は文を書くことが好きだった。いつかは作家になりたいと夢を抱き、かなりの本数の小説を書いては応募していた。

自分の文体は繊細で暖かく思いやりに満ちたものである事に拘っていた。どこまでも人間を信じ切った上での文章作りであった。

大学を出て就職した出版社で、週刊誌のゴシップ記事を書くようになって私は変わった。多少の抵抗はあつてなく打ち砕かれて、その後は驚くほど慣れていった。

上司は悪意に満ちた他人のスキヤンダルに人々の嗜好が集まることを良く知っていた。

淫らで下品であればあるほど、週刊誌は売れると豪語していたし、私は彼に気に入られようとして、ますます墮落した文を書いた。

例え、それが相手に迷惑を掛けたとしても、そんなものは問題にはしなかった。

一週間もすれば次の週刊誌が発行される訳だし、そんな物だと段々私も思っていた。

半年ほどで、ペンネーム『谷川野草』の名で六百字ほどの欄を持つことができた。

社会面を賑わした事件などを取り上げて、それを更にスキヤンダラスな記事に仕立て上げるのだった。

初めは試験的に私を使った編集長だったが、記事の評判は悪くなかったし、いや、むしろその週刊誌本体の目玉になる時さえあった。

私は他人の不幸の匂いを嗅ぐ感覚に優れていたし、私の文を愛するマニアックな読者層が大勢いる事に、迷う必要などなかったのである。

そんな時、私の書いた『生活保護者母子のあきれた生活』で扱った記事で、問題が起きた。

きちんとした取材がある訳もなく情報だけに推測を加えて、いつもの様に私は記事を書いた。この母子が保護費を不正に受け取っているかのように見せた。

また男性関係が派手で売春まがいの事をしているとの印象を載せたのである。

母子の住んでいた小さな街では徐々に噂は広まっていた。発売の直後にテレビ局が報道したのも噂に火を点けた。

—ほら、あの母親がそうなんだよ。で、その娘があの子なんだ—と皆が口にした。結果、その週の雑誌の売れ行きはいつもより少し多かった。

数ヶ月後、母は幼い女の子の手を引き、ある日、家を出た。

三日後、街を流れている川に浮かんでいる女の子を、続いて川底に母親が沈んでいるのが

発見された。

遺書はマスコミへの批判も恨みもなくただ『申し訳ありません。死んでお詫びします』とあっただけだった。

—私は恋人でもある編集長に呼び出された。

「まずったな……」

どの程度、会社が損を被ったのかは詳細は分からなかった。手切れ金つもりなのか退職金なのか些少の金を編集長は私に渡した。私は仕事と恋人を一瞬に無くした。

故郷に戻った私は自分に自信を無くし何の為に生きるのかさえ見失っていた。強い挫折感が心を打ちのめしていた。

故郷の家は儼くさくて閉じこもるのには丁度良かった。

暗い部屋で一人ポツネンと生きている自分が付くとやはり文を書いていた。

文を書くのはもう止めよう—そう思っていたのに、私が生きるとはやはり此処に戻る事なのか。後悔の中で、やがて彷彿と書きたいと言う思いが募ってきた。

やはり私は文を捨てきれなかった。やがて小さなコンクールで入選すると堰を切ったように、作品作りに没頭した。

一瞬の瞬きで消えてしまうような光景にも、全てが収められている。乱暴な自分を捨ててどんな小さな事柄にも観察の眼を向ける文を書くこうと強く心に決めていた。

街の本屋は商業地にある大型店の二階にあった。

散歩には程良い距離にあったので私はしばしばその本屋に通っていた。本棚は代わり映えない陳列だ。中学生達が五、六人漫画本の棚の前にたむろしている。店員は万引きされないうように必死に見張っている。

今日も得られたのは結局、疲労感だけだった。午後の陽の光は強く眩しかったが、夕刻ころにはそれも大分、優しくなっていた。

道は埃っぽく砂利を敷き詰めただけのデコボコ道であった。

陽は、やがて鬱蒼と生い茂る木々の間に落ちて行く。一軒の旧家が落日の光に包まれて静かに佇んでいた。嘗ては造り酒屋であったと聞いたことがある。私の足は自然とそこへと向かった。

凡そ二〇mはあろうかと思える長さの石塀が続いていた。奥の倉庫は当時の名残だろうか。杉板の朽ち果てた中にも『造酒』の墨字を読むことができた。

一瞬ひやりとした風が屋敷の中から吹いてきた。私は大きく深呼吸をした。その視界の先に、足を引きずるようにしたマスクの男が立っていた。

男は私を凝視していた。あの夜のように—

「やあ」

彼は確かにそう言った。

「今度は僕の庭に君が住居侵入ということかな」

此処には、人が住んでいない筈だった。確か、そう聞いていた。でも、彼は僕の庭と言った。人の気配のない古い家屋にこの人は住んでいたんだ。

そう思った途端に何故か私はまたしても体が硬直して言うことを聞かない。

右手は右足の太ももにくっつき、同じように左手は左足にくっついてしまっていた。

「ここは僕の家だよ。知っているかな？ 昔は酒造所だったんだ。どうぞ入って！」

相変わらず、くぐもった声はマスクの所為と思えた。緊張が緩み、私は庭に向かって、つまり彼の方へと足が動いていた。

近づくとも彼のマスクからはみ出た所が酷く爛れていることが分かった。それは酷い火傷の後と言った様子であった。良く見れば両手の腕も手も爛れて肉が引きつっていた。

「初めて見る人は大概、君みたいに驚いた顔をする。もうそんな眼には慣れたけどね」

彼はそう言った。私に、ある説明をするように。

「君は聞いたことがあるだろうか。この母屋で起きた火事のことさ」

私は急いで記憶のテープを巻き戻してみた。が、それは無駄なことだった。

曖昧な表情の私を見て彼は薄笑いを浮かべた。

「君がまだ、この街に来る前の事さ。君は都会で出版社のライターだったんだな。僕も君の文章を何度か読んだことがある」

嫌な予感が私の胸を強く突き上げる。この男から離れるなら今のうちだ。今、戻らないと取り返しが付かなくなる。不吉な予感を振り払おうと、私は頭を切り換えてこれからやるべき日常の生活を思い出した。

原稿の続きを書かなくてはならないし、野良猫に餌をあげなければならない。そうだ、新聞屋さんが集金に来ていたかも知れなかった。

瘦せこけた、いつも不機嫌な集金人の顔が瞬時に、頭をよぎった。

早くそうしなくてはと、自分を責め立てても体が言うことを利かない。足は地面にくっついたまま、ビクとも動かなかった。それどころかズブズブと音を立てて沈み込むようだった。果たしてこの先、この男は、どう仕掛けて来るのだろう。

「おや、君！ 何だか緊張しているのかな？ 顔色が悪い見たいだよ。僕の顔が恐ろしい所為かな……」

男がぶつくさと物を言うと、口から焼けこげたような臭いが漂った。体調がその臭いを放っているのか、朽ち果てた家の中から臭ってくるのかはつきりはしなかった。

風が出てきたようだ。裏の戸が壊れているのだろう。ドタンボタンと音を立てていた。

「良かったら座らないか……」

男はそう言って濡れ縁の端を私の為に譲るため席を空け、上目使いに私を見上げた。

—さあ、どうする？と言った顔をした。私は言われるままに、男の隣に座った。

眼の前には嘗て豪商を誇っていたであろう名残の庭が手入れされずに広がっていた。

伸び放題の灌木の中には、あるものは虫枯れて幽霊の如く、そしてあるものはコブだらけの醜い形をして立ち、充分に長い荒廃を感じさせた。

「―不思議なご縁だと思わないか？」

男は優越感を感じさせながら、口を開いた。

「……何を言ってるんですか！ 私はただ、この家を眺めていただけです。それなのに……」
「おやおや、泣きそうな顔をしているよ。そんなに怖がらなくても良いだろう？ 僕が縁と言ったからかい？」

男は一段と声に力を入れて話し始めた。

「ところで君の書いていた週刊誌の記事のことだがね。それは君にとつてどれほどの価値があったのだろう。君が書いた全ての記事には、全ておかしな一致点があるんだ。

例えばだね。……に依れば。……と思われる。……と言われているなどの出所不明の不特定者の発言だ」

―彼は何を知っているの？ 私の事など知らないくせに。

私は強く首を振った。

「いや、そうだ。君の記事の所為で死んだ人もいる。家族の形態も、未来ある子どもの夢も、一つの原稿で累が及んで一生を台無しにした人もね」

彼は私の最も深い部分に鋭く切り込んできたつもりなのだろうか。その上、何を目的に今更、この私に言おうとしているのだろうか。

そもそもこの男が何者なのか、それすら分からない。

「やがてその自殺者の事件が他の出版社の週刊誌に何週間も出たんだ。君は窮地に陥ったね。君を応援し持ち上げていた編集長は態度を変えて君を切った。もちろん、君との不倫関係もだ。まあ、彼に取っては渡りに船と言ったところだろう。君との関係が周りに知れる様になつていたしね……」

男は緑の木々に包まれて、穏やかな口調で私をゆっくりと切り刻んでいた。

私は、痛みを感じるどころか、男を小馬鹿にした心地よささえ感じていた。

……そう言いたかつたら、もつと言えよ！ 貴方は私を断罪しているつもり？ それで、それが貴方に何か不利を与えた事になるの？

……私は確かに、そんな売れっ子ライター―の時もあった。周りから持ち上げられいい気になつていた事は認める。不確かなネタを継ぎ合わせて膨らませ記事を作り上げるのは上手かった。

入社したての時、私の記事の作り方を見て散々文句を言っていた先輩が後に私に舌を巻いていたつけ。やれ青二才の青臭い文章だの、正義ぶったつて、そんなもの誰も読みたがらないよと。随分、貶されてやがて私もその種の記事の書き方は覚えていった。

それなのに、結果責任は自分持ちだなんて言われた時には、そんな馬鹿な！と思いつき反発したつけ。だけど、今では、そんな記事を全部忘れてしまっている。面白可笑しく読んでくれた人たちは一瞬にして泡と消えてしまったんだ。

良く、分かっている。つまり私も使い捨てだったつてね……。

ただ、私は何だか疲れてしまつて、ひどく疲れてしまつて。それで子ども時代に住んでい

たこの田舎に戻って来たのよ。両親はもう二人とも亡くなっている。

私はその親の葬式にも参列しなかった。丁度、他紙の週刊誌で私のバッシング記事が盛んに出ていたし、もう部屋に引きこもったきりって訳よ。

大好きだった、たった一人の姉は精神病院に入院中に自殺してしまっていたから、もう私はこの世で一人ぼっちになったんだ……。

夕闇に包まれた縁側には、満月の軌跡に沿って月の光が影を移していった。草いきれの強い匂いも大地の熱も今ではすっかり落ちていた。

静寂と夜のとぼりは男を暫くの間、沈黙させることが出来た。

マスクの中の引きつった肉は、丁度、私の心の中を写し取っているようだった。

誰からも愛されぬ体を引っ張って、ようやく故郷に戻ってきた。

だが、ここでも私は弾劾され、安住できないようだ。

— 貴方は私なのですか？

思わず私は男に問う。

— だとしたら？

男は冷たく言い放つ。

……なんて悲しい顔をしているの？　これが私だなんて……。こんな男と一緒になんて……

…嫌！　絶対に嫌！

屈辱で涙が溢れた。こんな男に私が断罪されるなんて許せない。

— 愚かな女め！　お前は何故自分がしたことを見つめられない？　それこそが最も大切なことなのに。

なことなのに。

— だとしたら？　もう遅いわ。私だって充分に苦しんできたと言うのに。— 私はまもなく

四〇歳になるけれど、それでもまだ充分に未来があると信じているわ。残念ね！

— これは恐れ入ったね。それでは君の犯した罪を此処に述べるとしようか。そこに僕がどう関係しているかも重要なことだね。

男の眼は異常に輝き、その粘っこい黄色い光は私の眼を射抜いた。

「残酷な出来事が僕を地獄に落とした。君の故意にねつ造された記事に依って世間から追いつめられて川に身を投げたのは僕の娘と女房だったんだ。

正確には離婚をしていたから元と言うべきか。二人を失って初めて分かった事がいっぱいある。二人は僕の生きる希望だったんだってことをね。それが今分かったんだ……。皮肉にも君のお陰でね」

それから男はずっと喋っていた。

二人を失ってノイローゼになり自殺を決意した。この家で灯油をまいて自殺を図ったけれど死にきれずに大火傷を負ってしまったこと。仕事も社会の信用も失ってしまったことなど

だった。それもこれも皆、私の所為だと罵った。

私はほとほと疲れ果て心の中で叫んでいた。

私はほとほと疲れ果て心の中で叫んでいた。

私はほとほと疲れ果て心の中で叫んでいた。

私はほとほと疲れ果て心の中で叫んでいた。

私はほとほと疲れ果て心の中で叫んでいた。

私はほとほと疲れ果て心の中で叫んでいた。

……誰かが死んだとか言う話なのね？ それが私の責任だった？ だって、自分で死んでいったのよ。面倒なことは出版社時代にもウンザリするほどあったっけ。抗議とか告訴とか、もう日常的に付き物なんだって、恋人の編集長が言ってたわ。そんなこと此処で思い出すなんて私も変だよ。

……貴方は気の毒だと思うけれど、私だけは恨まないでね……。

男はやがて鼻水を垂らして、涙声に変わっていった。

「君がこの田舎町にいたと知った時、僕は逆上したよ。それからどうにかして君の人生を抹殺しようと思夜、考えていた。考えて考えて僕はようやく諦めが着いたところだった。僕の愛しい娘が決して喜ばないだろうと思っただけ」

男はいきなりマスクを取り払って私に近づいた。

そこに現れたのは全くの別人の顔だった。

そこは、岩山にも似たデコボコの真つ黒な顔面があった。そこに美しい涙がキラキラと光りながら流れていた。私は恐ろしさで強ばった両手で頬に触れた。それから盛り上がった肉の間を少しずつつ指でなぞっていった。盛り上がった眼窩の肉は、次ぎにいきなり谷底に落ちる。そこは嘗て鼻が形良く通っていたはずだった。山脈は崩れ落ち真つ暗なホールが二つぽっかりと開いていた。

男は温和しく私に触られていた。それは意外な程だった。

「どうだ。どうだ。この顔は？ 恐ろしくないかね。気持ち良いかね？ お前がこうしたんだからな」

男は泣いていたのだろう。くぐもった嫌らしい声も今や最も人間臭かった。

遂に辿り着くべき場所に到達したのか……そんな不思議な感慨が心を充たした。

——私は彼を憎悪し、そして強く抱いた。

月の刃は冷たく光っていた。

木場和子
きはかずこ

1945年生まれ
茨城県在住、主婦
創価大学教育学部卒